

2020年辽宁省首届翻译大赛日译汉日语原文

つぎの日本語の文章を中国語に訳しなさい

私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じである。私は生かされているという宿命の中で、精一杯生きたいと思っている。精一杯生きるなどということは難しいことだが、生かされているという認識によって、いくらか救われる。

多くの挫折と苦悩、病気、精神の形成される時期の激しい動揺、芸術の上での長い苦しい模索。戦争の悲惨。

こんなふうだったから生の輝きというものを、私なりにつかむことが出来たのかもしれない。

私は一年の大半を人気のない高原に立って、空の色、山の姿、草木の息吹をじっと見守っていた時がある。好ましい風景を見つけると、その同じ場所に一年のうち十数回行って、見覚えのある一木一草が季節によって変わってゆく姿を、大きな興味をもって眺めたのである。

敗戦間近の日々に、私は熊本で爆弾を持って戦車に肉薄攻撃する練習を毎日やらされていたのである。ある日、私は熊本城の天守閣に登って輝く生命の姿を見たのだ。肥後平野の彼方に、阿蘇の裾野が霞む広闊な眺望である。雄大な風景ではあるが、特に珍しい眺めというわけではない。なぜ、今日、私は涙が落ちそうになるほど感動したのだろう。なぜ、あんなにも空が遠く澄んで、連ねる山並みが落ち着いた威厳に充ち、平野の緑は生き生きと輝き、森の樹々が充実した、たたずまいを示したのだろう。

私は絵を描く望みも、生きる望みも無くなった。私の心が、この上もなく純粹にな

っていた。死を身近に、はっきりと意識する時に、生の姿が強く心に映ったのにちがいない。

汗と埃にまみれて熊本市の焼け跡を走りながら私の心は締めつけられる思いであった。

いま、考えてみても私は風景画家になるという方向に、だんだん追い詰められ、鍛え上げられてきたと云える。人生の旅の中には、いくつかの岐路がある。中学を卒業する時に画家になる決心をしたことも、しかも、日本画家になる道を選んだのも、一つの大きな岐路であり、戦後、風景画家としての道を歩くようになったのも、一つの岐路である。その両者とも私自身の意志よりも、もっと大きな他力によって動かされていると考えないではいけない。たしかに私は生きているというよりも生かされているのであり、日本画家にされ、風景画家にされたとも云える。その力を何と呼ぶべきか、私にはわからないが…

——東山魁夷『風景開眼』より